

回 覧



値小だより

島から日本一楽しい学校を
～子どもが未来に誇れる学校～

平成29年 9月26日 第13号

校長 酒井元治

チャレンジ！修学旅行

台風18号の接近がとても心配だった日程でしたが9月13日～15日、2泊3日で修学旅行に行ってきました。コースは例年通り、佐世保～武雄(宇宙科学館)～島原城～深江(火砕流被災地跡)～雲仙泊～長崎市(平和記念館、班別自主研修)～長崎市泊～佐世保・三川内(焼き物絵付け体験)～小値賀でした。今年の6年生もしっかりマナーを守り、他の団体や宿泊客に迷惑をかけるということは全くありませんでした。また、チームワークもよくそれぞれが助け合ったり、声をかけ合ったりする場面が随所に見られました。

そして、子どもたちが一番楽しみにしていたことの一つである「長崎市内班別自主研修」は子どもたちにとって大きな成果がありました。出発する前にも私が話したことは「ちょっとチャレンジしてみる事」です。見ず知らずの人に道を聞いたり、買いものをするときお勧めのものを聞いたりするのは小値賀では考えられないことです。失敗するかもしれない、でもそれも大切な勉強です。そんなことを話して、長崎の町に子どもたちを解き放しました。

帰ってきた子どもたちの話を聞くと、「おみごと！」というような体験をみんながしてきました。「校長先生、道を何回も聞いてきましたよ。」とか、「道を聞いたら、中国人で全然通じませんでした。」とか「路面電車を反対方向に乗っちゃって、正覚寺まで行ってしまいました。」とか、なんともすばらしい経験ばかりです。



失敗も大切な経験。小値賀でできない経験を重ねてきた子どもたちでした。そうそう、中には「原爆資料館のトイレに行って、鍵がかかっていたのでドアを開けたら、中で中国人のおばさんが用を足していました。」という女の子もいました。私が、「国によってはドアが付いてないトイレもあるんだよね。トイレトーパーを流すことができず、ゴミ箱におしりを拭いた紙を入れるところもあるんだよ。」というような話をすると、「あっ、そういえば、そのゴミ箱もいっぱいでした。」と、トイレで国際理解の学習もすることができました。

まあ、それでも他人がトイレに入っているところ見たくはなかっただろうな(-_-;)。

若いって、魅力！

先日、ご案内しておりましたように、21日と22日の放課後、県立大学の学生さんが12名来校してくださり、子どもたちと色々な交流をしていただきました。2日間でのべ60名を越える参加者がありました。1日目は宿題の見守りをした後、運動場でいっしょに遊んでもらいました。2日目は、学習はほぼなし、高学年は体育館でドッチボールやバスケットボール、低学年は運動場で鬼ごっこや自由遊びでした。両日とも子どもたちに両手を引っぱられて連れ回される学生さん、手抜きなしのドッチボールやバスケットボールに付き合わされ、くたくたにさせられる学生さんたちでした。相手をさせている子どもたちはというと、日頃先生たちと遊んでいるときは目の色が違います。キラキラした目で心から楽しんでいました。(いやいや、先生たちと日頃遊んでいるときも心から楽しんでいるのですが、やはり何かが違うんです。)

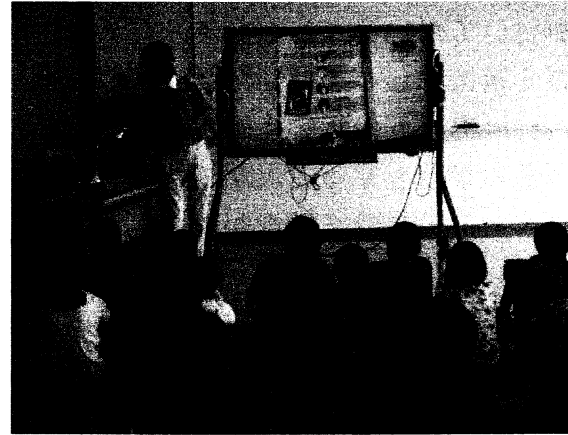
また、そのうちの3人は中学校の学習を応援。大学生とはいえ数年前の勉強を思い出しながら「むずかしい～」とこぼしていました。

それでも、「小学生も中学生もかわいいですね。とても楽しかったです。」と感想を伝えてくれた彼らです。子どもたちは、来島した若者の集団にエネルギーやちょっとしたあこがれなど普段は味わえない何かを感じたと思っています。

いやあ、若いってすばらしいとつくづく思いますし、学生のみなさんに心から感謝します。



県立大学・山崎教授を招いて

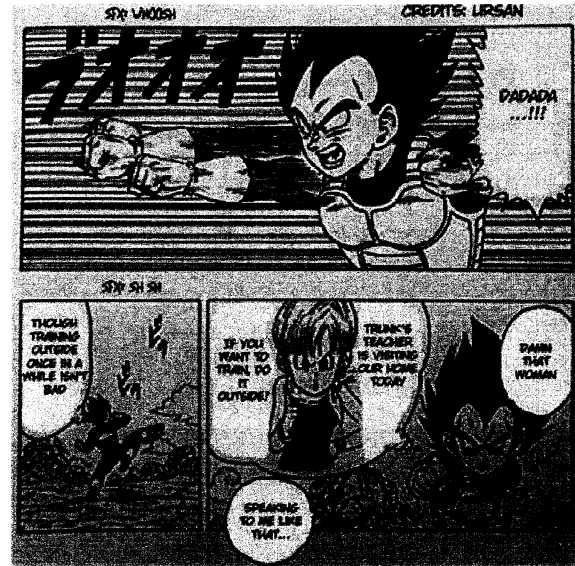


小値賀町では、小中高一貫教育の中で英語教育にも力を入れようとしています。英語を話せるようになる、わかるようになるということも大切なのですが、英語を好きになること、英語というツールを生かして、世界を見てみよう、他の文化をのぞいてみようとする意欲を高める、このことは小学校で英語を扱うときに最も大切なことの一つです。

小値賀町では、昨年未よりこの国際理解の第一人者である長崎県立大学の山崎祐一教授にコーディネーターをお願いしています。9月20日には、小値賀にお越しいただき、小学校5・6年生を対象に「英語の世界をのぞいてみよう！」と題し、先生ご自身が授業をしてくださいました。

まずは、「英語ができるってことは、こんなに得になるんだよ。」という話。例えば、私たちが調べ物をするとき、昔のように辞書などを使うよりインターネットで調べるという方が一般的になっています。このインターネットのホームページ(英語では **website**)は基本的に世界中で見ることができるのですが、その9割は英語で書いてある、あとの1割が他の言語でさらにそのわずかな部分が日本語です。つまり英語ができるのとできないのでは、得られる情報量に雲泥の差があると先生はおっしゃいます。

次に登場するのは、子どもたちが大好きなマンガの本。だけど、アメリカ版の本です。もちろん吹き出しは英語です。ご存じのように日本のアニメは外国でも大流行。ただし、日本の文化をバックに作られたものです。アメリカ人が読んだときにわからないことがいっぱいあります。例えば、本の開き方。日本のマンガの本は右開きですが、英語の本ではそんなのありません。みんな左開き。ですから、アメリカ版のマンガの本は左を開いたときに、「ここは最後のページ



じ方が違うのか、音も国によって表し方が違ってくるので、そのまま読んでも理解できないことがあります。

また、右の絵は「となりのトトロ」の親子での入浴シーンです。これも、アメリカでは理解しづらいことです。

- ・アメリカでは湯船につかる習慣がない。
- ・親子での入浴習慣がない。(アメリカでは幼い頃から子どもだけで入浴、赤ん坊は台所のシンクを利用して体を洗うそうです。)
- ・夜に入浴するのはまれ。

このような理由からこのシーンを「ほのぼのとしている」と感じるの難しいと山崎先生がおっしゃっていました。

また、パーソナル・スペースといわれるものを実演。6年生の女の子に「他人と話をするとき、ここまで近寄られたらイヤだ、という距離でストップをかけて。」と言われて、女の子に近づいていきます。「ストップ」をかけたのは、**1m50cm**程度。先生曰く、日本人の距離はだいたいこれぐらいだそうです。どうしてかという「おじぎ」をしなければいけないから。それに対して、アメリカ人は**50cm**～**1m**程度。お察しの通り「握手ができる距離」だからです。

このように、国によって文化が違うこと、それを認め合うこと、先入観で人を見ないことが大切だという授業でした。これって、国際理解に限らず人と人との付き合いの中で大切なことだと思いませんか？

です。」ということが書いてあります。また、擬音語や擬態語も違います。「ガッシャーン」と物が碎け散った音だって、英語では「**clash**」(クラッシュ)などと表現。犬だって「ワンワン」じゃなく「**woof**」(ワフ)や「**bow-wow**」(バウワウ)と表現します。左のマンガの一部、上のコマに「ブオオオ」と書いてありますが、これは英語では通じない。そのまま「**buooo**」とかと表現するのではなく上に「**SFX WHOOSH**」と表記してあります。耳に届く音、感

